

白山ふるさと文学賞

第十四回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【暁鳥敏部門】〈作文「母へのおもい」または「家族へのおもい」〉

小学生5・6年の部 優秀賞

「家族への思い」

広陽小学校六年

伊藤 とう

睦人 りくと

ぼくは今、父・母・妹・おじいちゃん・おばあちゃんとの六人で暮らしています。今年の春から父が能登に転勤となつたこともあり、平日はいません。母も看護師をしていて夜勤などもあるので、おじいちゃん・おばあちゃんと過ごす時間が多いです。

今年の三月、ぼくはノロウイルスにかかりました。気持ち悪くて、吐きそうな感じがあつたけれど、吐くのが怖くてずっとがまんしていました。でも、とうとう限界が来て、吐いてしまい、今でもその時のことを見つかり覚えています。それがきっかけで、体調が悪くなるとすぐに吐いてしまうのではないかという不安を感じてしまうようになりました。少し咳が出る、鼻水が出るだけでも、怖くてごはんが食べられなくなりました。楽しいことを考えると、元気になれると思つたぼくは去年の運動会の応援団が楽しそうだったので、今年もやってみようと思つた。でもまさかの多数決で応援団長に選ばれ、一気に楽しみから、チームをまとめないといけないというプレッシャーを感じるようになりました。なかなか思うように応援練習がうまくいかず、友達と言ひ合いをすることもありますがたくさんありました。胃が痛くて、ごはんが食べられないこともあります。でも応援団長として、やると決めたからには「責任を持つて頑張らなといつけて」と思いました。本番では、応援団みんなで協力しあうことができ、優勝はできなかつたけど、チーム一丸となり、運動会を終わらせることができたので、自分にとつて最高の運動会であり、応援団長になつて良かったなと思いました。でも、そのあと体調がよくなることはなく、お腹が痛いことが続き、さらに食べられなくなりました。体重も減り、立つているためまいを起こすようになります。ぼくがどんどん弱っていくのを見た家族は、とても心配していました。学校を早退することが増え、体調が悪い時が長かつたので、病院の先生とも相談し、大きい病院で検査もしました。身体の中には悪い所はなかつたということがわかり、少し安心はしました。それでも

「気持ち悪い。」という思いはなかなか消えませんでした。ぼくは、家族にたくさん迷惑をかけてしまつて、心配をさせてしまつて、みつともないと思いました。隣で元気に笑つている妹がうらやましくて、「うるさい！だまれ」と怒つてしまふこともありました。そしてそう言つてしまふ自分にまた、いらつき「ぼくなんてうまれてこなければよかつた」と母に言つてしましました。そしたら母は泣いてしまいました。おばあちゃんからは、ぼくが生まれる前に流産というつらい経験をしていたこと、へそのおの位置が悪く、あと少しずれていたら、ぼくもうまれてきてなかつたかもしれないということを聞き、ぼくが無事に生まれてきたことをみんなで泣いて喜んでいたと知りました。そこから、母やおばあちゃんとたくさん話をしました。そして少しでもごはんを食べることができるよう、母は消化の良いこんだてを考えてくれました。父もまた、週末に帰つてきた時には、ぼくが笑顔になれるように、おもしろい話をたくさんしてくれました。おじいちゃんは、ぼくのお腹に手を当て、マッサージをしながら、「大丈夫、大丈夫」と声をかけてくれました。母が夜勤の日には、おばあちゃんがぼくの話をたくさん聞いてくれて、寄りそつてくれました。そのおかげで今少しずつではあるけど元気になつてきました。

ぼくはビビリなので、きっとこれからも、体調が悪くなつたり、ストレスがかかつたりすると、不安に感じ、いろんなことをネガティブに考えてしまうと思います。でも、自分には不安な時に助けてくれる家族が近くにたくさんいてくれるので、これからもなんでも相談していきたいと思います。こないだ見た鬼滅の刃という映画で、炭次郎が「強いものは弱いものを助け守る」と言つていました。その言葉の通り、今は家族に守られているぼくだけど、これから少しずつ強くなり、いつかぼくが家族を支えることができるようになつていきたいと思います。